

---

# 偽物語

ゆうき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偽物語

### 【Nコード】

N04290

### 【作者名】

ゆうき

### 【あらすじ】

人を見る目、がある女子高生、朝霧<sup>あさぎり</sup>漑<sup>みお</sup>。平凡な日常を過ごしていた彼女は、学校の帰り道、突然何かの穴に落ちた。落ちた先の中世風の街中で何とか平凡に過ごしていた彼女に、次々と災難？が降りかかる。私は平凡に過ごしたいだけに！そんな女の子と、彼女を取り巻く王子様達のコメディ&微シリアス物語。

この世界に来て、色々あったけど、大切な人と出会って、愛する人  
が出来て。

奇跡があるなら、きっと、私のこの日常が奇跡なんだね。

偽物語 にせものがたり

ふああ、と欠伸をする。眠い、眠いよすごく。

季節は秋。食欲の秋だなあ、なんて考えながら帰宅の道につく。

私は朝霧<sup>あさぎり</sup>零<sup>みお</sup>。ごくごく普通の女子高生だ。

ごく普通と思っているのは私だけで、友達からは冷めている、とかよくいわれる。

私はただ単に面倒事を避けているだけだ。

私は、昔から人の目を見ると大体相手がどんな人間だかわかる。

それは、特殊な能力などという物というわけではなく、ただの勘だ。幼稚園児の頃には格好良いお兄さんに声を掛けられたが、すぐに犯罪者だと分かった。

逆に、中学生のころは皆に嫌われている先生がいたが、目を見てち

やんと話してみれば気さくでいい人だと分かったり。

そんな些細な事だけど、自分の子の目は結構気に入っている。

面倒な事を避けられるだけではなく、いい人を見つけられるって、かなりお得だと思う。

まあ、ただ人間観察が上手なだけだと思っただけだね。

そんなこんなで、私は面倒事に巻き込まれる事も無く平凡な日を送っていた。

送っていたんだけど。

帰り道、それも普通の歩道橋で 落ちる って、どーいうわけ？





## 1 - 1 (後書き)

はじまりました、新連載。

王道の良世界トリップものです、。

ゆったりまったり更新していこうと思いますので、どっぞ宜しくお  
願いします。

「アサギリー、ちょっとこっち来て、手伝って!」

「はい、ただいま!」

こんにちは、漣です。

訳あって今、お店でバイトをしています。

お店でバイトといっても、此処はなんと異世界。俗に言うトリップというやつです。

……なんでこんな目に会わなきゃならないんだ。

そもそも、なんでこんな事になっているかという点、話は一か月前のあの夜に遡る。

帰り道、道端で真っ黒な穴に落ちた私。気を失って、気づいたら綺麗な、森の中にいた。

原因は全く分からない。ただ、落ちた、という事だけが分かる事だった。

クローバーが敷き詰められたようになっていてその場所で、私は眠っていた。

何かに揺さぶらると思ったなら、そこには40歳ぐらいの女の人がい  
た。

彼女はマルサ・ティデリーさん。

異世界に来て倒れていた私を見つけてくれた命の恩人だ。

混乱している私を落ち着かせてくれて、街まで連れてきてくれた。

彼女は旦那さんと一緒にお店を経営しているらしい。なかなかおい  
しいって評判のお店らしいよ。うん。

で、事情を説明しても分かってもらえないと思った私は記憶喪失を  
言う事にした。その方が都合が良いから。

そうしたら、なんとマルサさんは私をお店で雇ってくれると言った。  
何でも、娘さんと同じ年頃の私を見捨てておけないとか。

私にとってもとっても助かる提案だったのでありがたく引き受けた。

そんなわけで、私はこのお店で住み込みアルバイトすることになっ  
た。

ただ、なあ…。

この私の落ちてきた世界は、私の居た世界で言うところヨーロッパあた  
りの中世風だ。

外人さんだよ、外人さん。みーんな体格が良くて160センチの私  
が小さく見える。

成人男性、普通に2メートル以上が当たり前だからなあ…。女の人  
でも大人なら180センチはある。

高校一年生、16歳だと言ったら、皆に疑われた。

この世界では13歳ぐらいだってよ。けっ！中学生に見られている  
とは、なんか屈辱…。

ただ、私の居た世界と違うのは一つ。

髪や目の色が多種多様なんだ。金髪はもちろんのこと、赤、青、緑、銀……。これぐらいだっただろうか。

国ごとに色が違うらしい。何だ、私はあまり社会の勉強は苦手だったから、あんまりよく分らないけど……。

此処はハルアヴォルト帝国。属国を六つ従えてる、大陸でも一、二位を争う大国らしい。

ちなみに、マルサさんはアスフエシアという国出身らしい。

金髪碧眼が主な容姿で、マルサさんはその特徴をそのまま受け継いだかのように金髪碧眼の美人さんである。

食べ物美味しい国だそうで、だからお店を開きに王都まで出てきたらしい。

六つの国も、均衡がとれていてハルアヴォルト帝国は今平和らしい。水面下では色々あるらしいけど。

私のいる場所は、いわゆるハルアヴォルト王都という場所で、属国の人たちも色々集まってくる賑やかな都だ。

そのため、色々な髪の色、風流、国民性、とにかく色々な人がいる。

そんな場所で、私はアルバイトをしているわけですが。

いやあ、言葉が通じて本当に良かった。何でも、帝国の共通語が日本語らしい。

読みは全く分からないけど。英語がミミズになったような文字、今練習中です。

13歳のマルサさんの娘さん、ミリア・ティデリーちゃんが教えてくれる。年下に教えてもらって、ちょっと恥だが仕方ない。

まあ、そんなこんなで、私は何とかこの世界で暮らしています。



「アサギリちゃん、アップルパイとアフタヌーンティーを宜しくお  
願い。」

「アサギリちゃん、俺は日替わりランチ！」

「はいはい、ただいまー！」



お店は朝から忙しい。結構繁盛しているので、お客さんがたくさん来る。

私のお店でまあ、私の世界で言う注文係とか、運ぶ係とか、レジみたいな所謂雑用をしている。

特に忙しいのがお昼と夕方。忙しかったらありやしない。まあ、お世話になってるみだから繁盛してくれるのは嬉しいんだけどね？ 一か月もすれば仕事に慣れて、常連さんには顔も覚えられて「アサギリちゃん、」と言われている。

身長と日本人独特の童顔のせいだろう、子供扱いされているような気がして仕方がないのだが。

まあ、御褒美といって甘いものくれたりするお客さんもいるからいいんだけどね！甘いものは美味しいし。

この世界の主食はパン。勿論お米は無い。一か月もするとお米や味噌が恋しくなるのだが、我儘は言ってられない。

お店の厨房を深夜借りて色々な日本料理を作ってみたりするのだけれど、……、料理ぐらいできますよ、それでも伊達に一人暮らしやってたわけじゃないんだから！

私がトリップしたときに持っていたカバンの中に図書室から借りた料理の本が山ほど入っていたのが助かった。

マンネリ化した我が家の食卓を改善するべく借りた本が、こんな場所で役に立つとは…。

ちなみに、学校帰りだった私のカバンの中には、勉強道具、山ほどあるお菓子、眼鏡、本、化粧道具、演劇用のウィッグが入っている。黒髪はこの世界に珍しいらしい。というか、居ない。

だから、私が異世界に落ちた時に偶然に一緒に持って来たかばんのなかに入っていた演劇用のウィッグを被って生活している。

使い辛い、仕方ない。おかげで私は今金髪だ。

マルサさんだけには黒髪を見られたが、記憶喪失という事で何も知らないをつき通した。

優しい人なので、深くは突っ込まないでくれたけど。

お菓子はこちらでは貴重なガムなどが入っていたため、ちまちま口がさみしいときに食べている。

幸い、買いためておいたところだったから山ほどある。ふっふっふ。

「アサギリ、最近どう？もうこの場所には慣れた？」

「はい、マルサさん。もう仕事にも慣れましたし、順調です。」

「あんたみたいな子供に仕事させて悪いねえ、本当なら何もせず普通に過ごしていてもいいんだけど……。」

「あはは…、私もう16ですし。何もしないのは悪いですし、住み込みさせて頂いているだけで有難いですから。」

相変わらず私の事を子供だと思っているマルサさんに苦笑する。  
まあいいんだけどね、優しくしてもらえるのは良い事だしー。

「そっぴゃあ、もうすぐこの辺で式典が開催されるから、店忙しくなるだらうけど頑張ってね。」

「式典？」

「その辺で聞かなかったかい？シルヴァイアのお姫様がハルアヴォルトの第二皇子と婚約するのさ。」

「第三皇子、ですか？」

「ああ、レヴィル殿下だね。美男美女でそりゃあもう街は大騒ぎだよ。」

「そうなんですか。」

「ああ、目の保養になるよ。レヴィル殿下は。」

につこりと笑みを浮かべてマルサさんが言う。  
そりゃ、なんだか街が賑わいでいるのもうなずけた。

「母さんはレヴィル殿下ばかり贔屓して。シュベルツ殿下の方が格好良いじゃん！」

お、なんだ、ミリアちゃんも参戦か？

「何を言ってるんだい、レヴィル殿下の方が可愛いじゃないかい、」

「シュベルツ殿下の方がカッコいいー！」

やっぱり女の子は恋バナが好きだな。マルサさん、旦那さんはどうしたんですか。

「レヴィル殿下とシュベルツ殿下ってどんな方なんですか？」

素朴な疑問をぶつけてみた。

「レヴィル殿下は今も言った通り第三皇子でね、現皇帝陛下のご兄弟さ。確か今年で23歳になるんだったかな。そりゃあもう見事な銀髪を持った美男さんでねえ。灰色の瞳に肩に届くぐらいの髪の長さでとんでもない秀才さ。武術にもたけていて誠実なまさに皇子様といった感じのお人さ。」

「それでね、シュベルツ殿下は第二皇子様で確か今年で29歳になられるはず！それはもう美しい金髪に透き通った湖のような青い瞳は吸い込まれそうなのだと貴族の女性の中では評判だそうよ！現帝王陛下の右腕とされる方で、もうそのお仕事の出来のよささというたら、天才といってもいいほどだわ！」

……、うん、とりあえず、二人の勢いがすごい。

まああれだ、何となくすごい皇子だってことは分かった。

まあ、私には関係の無い人たちだろう。平凡な日常を送る私にとっては。

「ねえねえ、式典、一緒に見に行こうよ、アサギリ！」

「そうだね、少しぐらいなら抜けてもいいから、見に行っておいでよ。」

「はあ、わかりました。」

気の抜けた声で返事をする。あんまり興味無いんだけどなあ。  
ま、出店とかあるかもしれないし、見に行くのもいいだろう。お菓  
子食べたい。

そんな気軽な事を考えていたが、私の日常は、この日から少しずつ  
崩れていくことになる。



運命とか、私はそんな言葉信じてはいないけど、  
運命の歯車なんてものが本当にあったなら、それはほんとにややこ  
しく厄介な物でしかないだろう。





式典を明日に控えた今日、私は明日のための食材を買いに街に出た。もう此処に来て一ヶ月半ぐらいは過ぎていて、街の道とか、裏道は覚えた。

悪ガキ達に教えてもらった秘密の裏道なんとも知っている。こういうのはきつといつか役に立つ。ふふふ。

「えーっと、後はキシユカの実だけだな。」

メモを見ながらヨーロッパ風の街並みを歩いている。

街は綺麗だし、活気もあって私は結構気に入っている。

このままこの街でゆったりと暮らしながら、

もとの世界に帰れる手がかりを見つけられればいいな、なんて考えていた。

そんなとき、ふと後ろから衝撃が走った。

誰かにぶつかられたみたいだ。

ぶらぶらと歩いていただけだから、急な衝撃に備えなんてあるわけもなく私は転んでしまった。

抱えていたパンやら色々な物を道にぶちまけてしまった。

いたた……。顔をあげたら、そこにはマントを着てフードをかぶっている背の高い男に人がいた。

相手はこちらを振り返ったが、すぐに踵を返していつてしまおうとした。

誰かから逃げているように急いでいるようだけど……。

正直、ぶつかった女の子を置いていくって、どうよ？

私は、そこらじゅうに転がった買った食材の中で、一番堅そうなジャガイモみたいな、グスカという、手の平サイズの丸い食べ物を手に取った。

立ち上がり、そして大きくのけぞれば、野球のピッチャーの如くグスカを走り去る奴目がけてぶん投げた。

グスカは相手の頭に直撃。奴は前向きに倒れるようにして蹲り、頭を押さえていた。

ははん！伊達に男子に交じって野球やってた私じゃないんだよ！魔球の恐ろしさ見たか！

相手に近づき、隣までやってくれば、うずくまる相手を見下ろし私は言っちゃった。

「何を急がれてるのは知りませんが、人にぶつかったら謝るだの

助けるだのする事はあるでしょう。いい年した大人が恥知らずな事をするものではないですよ。」

言ってやった、言ってやったぞ！

でもやばい、これで怖い人だったら私どーしよー、やべ、計算に入れてなかった。  
どうしよー！

相手は立ち上がれば、私の方を一瞥した後、ぺこりと頭を下げた。

「すまない。追われていたものだから。」

……あ、この人いい人だ。  
なんだか、あんなものぶつけちゃって罪悪感がむくむくとわきあがってくる。

「あ、あの、いえ、お気になさらず。私こそ申し訳ありませんでした。」

一応頭を下げておく。  
そうすると、相手の人はキョトンとした後、無表情なその顔を少しだけ綻ばせた。

「ああ、確かにあれは痛かった。」



突然、大きな音がした。

「チッ、もう来たか。」

「え、え、え、なに!？」

非日常が、やってきました。



ガラガラと瓦礫が崩れる音がする。もくもくと砂埃が立っている。  
その様子を茫然と見つめる。  
え、た、大砲でも打たれたんですか？

「みーつーけーたーぜえ……？……逃げんじゃねえよ。」



砂埃が収まって、一つの影が見える。

これまた身長の高い、赤い長髪を一つでまとめてくくっている野性的な男性。

ちなみに、私の隣に立っている人は茶髪だ。

茶髪といっても、日本人が染めた感じじゃなく、地毛なのだろうサラサラとしていて綺麗だ。

と、そんな事はどうでもよくて。

まさか、まさかだけどね？この瓦礫を拳で壊したなんて事…、無い、よね？

思わず後ずさりする。  
危険だ。逃げなきゃ。

そう思ったとたん、茶髪の人に腕をひかれ抱きあげられる。

なになに！？

「走るぞ。口を開くな。舌をかむ。」

ええええええええ、！？ちょ、ま、っ！

それから、茶髪さんは物凄い勢いで走りだした。  
オリンピック選手顔負けの速さで、だ。

いろんな町の角を曲がったり潜ったりと、相手を巻くように道を選ぶ。

「待ちやがれーっ！」

という声とともに赤毛の彼が追いかけてくる音がする。  
茶髪さんが苦しそうな表情を浮かべていたので、私を抱えてはきつい  
のでは、と思った。

「その角、！右に曲がって！」

咄嗟に私はそう言う。

街を何度も行ったり来たりしているのだ。構図は覚えている。

茶髪さんは私の言うとおりに動いてくれた。

「そこを左に！次はまっすぐ、右言つて、右を曲がって、そこ潜つて、！」

アーチになっている林のようなところに出たところで、いったん捲けたのだらう、私を下してくれた。

「厄介事に巻き込んで済まない。君は此处から帰りなさい。」

「あ、はい、分かりました……。」

「では、。」

そう言つて、茶髪さんは華麗に去っていく。

いったい、今日は何の厄日だ？

そもそも、いったい彼らは何者なんだ？

来ている服装や、品がよさそうなところから指摘族には間違いない、  
と思う。

なんて事に巻き込まれたんだろう私。

ただ、平凡に過ごしたいだけなのに。

そこで、はた、と気づく。

買った物ぶちまけて帰ってきちゃった！  
あーもう、どーすりやいいの。

踏んだり蹴ったりな一日が終わった。  
でも、これは私の災難の始まりにすぎない。

昨日はひどい目にあつた。

もう、あんな事はご免こうむりたい。

茶色の髪を持った、あの男性はいい人っぽかったけど貴族らしさがあつたから嫌だし。

赤い髪を持った、あの男性は肉食獣のようで鋭い目をしていた。思い出すだけでぞっとする。

買い物しなおして帰って事情を説明したら、「災難だったねえ、」  
ってマルサさんが言ってくれた。  
全くだ！

あ、余談だが、買い物したものの中には、私が料理するものも入っているのだ。

私がこそそとつくっていた日本料理を、マルサさん達が食べておいしいと言ってくれた。

それだけで嬉しかったのに、お店の料理にしようとまで言ってくれたのだ。わお！

厨房の人たちに色々な料理を教えてあげている。これが結構楽しい。

こんな風に、楽しい時間が過ぎていく事は良い事だと思う。  
明日の式典も、楽しければいいんだけど。



まあ、そんなわけで、今日は朝早くから式典という事で朝食を食べにくるお客さんが多い。

いろんなところから来てる人がいるので髪の毛も色々な色がいつもよりいて、見てて面白い。

でも、目を見ながら喋っていると、善人ばかりじゃないようで気をつけなくては、なんて思っている。

というか、午前中に行われる予定だった式典は、午後に変更されたらしい。

何か不備でもあったのだろうか？まあ、知ったこっちゃないけど。

で、ここで問題。というか、やばい予感がする。

開店したところから今まで、あ、今っていうのは私の居た世界で言う  
10時ごろなんだけど。

ずっと、隅に居座っているお客さんがいる。

そのお客さんが、どーも昨日の輩と同じようなにおいがする。

要するに、貴族っぽいつてことだ。

あーあー、なんでこんな場所にいるんだお貴族さまが。

とりあえず、問題を起こさないように。なるべく関わらないように。

そんな事を考えながら、その危険人物へと注文を取りに行った。

「ご注文は？」

「キシユカのパイとハルヴァのパフェ、ブラウンティー。」

「……キシユカのパイとハルヴァのパフェとブラウンティー、以上で宜しかったですか？」

「ああ。」

甘いもんばかり。甘党なんですね、お兄さん。

すっぽりとかぶったマントからこぼれ出ている、肩に届くぐらいの銀髪が美しい人だ。

先ほど注文を承った時に見たが、綺麗な灰色の目をしていた。

全く、貴族には美形が多いのだろうか。庶民の女の子が騒ぐわけだ。

注文をマルサさんに伝えて、出来上がったものをミリアが運んで行くこうとしているところだった。  
さすがに三品はまだ重いのだろうか、ちょっと手元がふらふらとしている。

…おいおい、危ないぞ？お客様にぶちまけてくれるなよ？

嫌な予感がする。大抵こういうときは予感が当たるんだ。

ふらついたミリアちゃんは、床のきしんでいるところに躓いて転んでしまった。

放りだされたキシユカのパイとハルヴァのパフェとブラウンティー

は吸い込まれるように銀髪のお兄さんに向かって落ちていく。

ガシャーン、！という音と共に、デザートたちがあの銀髪のお兄さんに降りかかる。

ミリアちゃんは真っ青になっておろおろとしている。

..... やっちゃったよ、おい。



デザート汁やホイップクリームでぐちゃぐちゃな貴族さま（仮）。

怒りのオーラが目に見えるほど怒ってて、ミリアは真っ青。

ああ、私はどうすればいい？

「お客様、大変申し訳ありませんでした。お召し物をお変えになりますか？」



そう言つて、間に入つた。ああなんで私こんなことしてるの？  
面倒事は避けて通るたちじゃなかったのか私。

怒りの矛先は私に向けられた。

ひいいひいいひ！美形が怒ると迫力あるうつつうつつ！

でも、目を見れば、悪い人じゃないってわかる。

少し安心。自分の目を信じて、喋ればいいと思う。……たぶん。

「此処の店員は品を客にぶちまけるものなのか？そうだとしたら、  
この店は最悪だな。こんな店に客が来ていること自体おかしいと俺  
は考えるわけだが。大体、こんな餓鬼を使っているなんて、ろくな  
ことにならないと分からないものか。全く、下界に降りてみればと  
んだ災難にあつたものだ。」

………前言撤回。こいつ最低人間だ。

や、普通さ、此処までは言わないでしょ？ムカついててもさ。

下界とか言ってるあたり、お貴族さまとかそういう偉い人には間違いないらしい。

でも、私はそんな事は気にならなかった。

ただ、大好きな人の店の事貶をされたということが許せなかった。

いったん相手に踵を返して店の外に出る。  
相手はキョトンとしているが知ったこっちゃない。

私は井戸から水を素早く汲んできた。  
そして、また銀髪の彼の所までやってきて、

思いつきり頭から水をぶっかけた。

「お客様。これで綺麗になりましたし、ついでに頭も冷えたでしょうか？」

目の前には怒り狂って絶対零度の雰囲気醸し出している相手。  
さあ、この先どうなる？



うわ、怒ってる怒ってる。

綺麗な顔が歪んでますよー、怒りで。

だが、私も怒っているからおあいこだ。



お店の事をあんな風に言うなんて、この男許せない。

銀髪さんの手が振り上げられる。  
あ、やばい。

私はこの世界の人たちと比べると、力が弱い。  
それなのに、成人男性の相手に殴られたら、骨の一本でも折れるだろう。

目をつむって、次の衝撃に備えた。

が、ここで予想外の事が起きた。

第三者の乱入だ。

銀髪さんの腕を掴んで私を助けてくれたのは、  
見事な波打つ金髪が美しい、透き通った蒼い瞳をした人だった。

マントをかぶって顔を隠しているようだったが、近くにいた私には見えた。

この人の目は、悪い人の目ではない。ただ、とても

「兄上、！」

「お前は、こんなところで何をしている？」

「……兄上には関係ない！」

「関係あるだろう。今日は式典だというのに、すっぱかして何故こんな場所にいる。」

あるえ。なんか、すっごくやばい会話を聞いているようなんですけど。

「…元々！私はこんなことに反対だったのだ！」

「それが務めなのだからない。私達皇ぞk…「あの一。」

思い切って声を掛けた。

この人たちは、私の勘違いじゃなければ

「それ以上言ったら、ばれてしまうと思いますよ？大変なことになるんじゃないですか？」

二人とも、ハツとした顔をした。

..... ああ、こりゃ、ビンゴだ。

皇族の、レヴィル殿下とシュベルツ殿下がなんでこんなところにいる？



あー、やばいやばいやばいやばい。  
なんで皇族の人なんかがこんな一般市民の店にいるんだ。

「とりあえず、戻るぞ。」



「……。」

レヴィル殿下は無言だったが、一応は頷きシュベルツ殿下の言葉に従うらしい。

あ、帰るんだ、よかった！

「君。」

あれ？

「はい、何でしょうか？」

「すまないが、ついてきてもらおう。」

.....はあああああああああああああ！？

「いえ、あの、私は...、」

「悪いが、拒否権は無い。私たちが何者かはもう気づいているだろう？」

シュベルツ殿下が無情にそう言う。

皇族にそう言われては、しょせん庶民の私はどうとも言えなくて。絶対命令には、従わなくちゃいけない。

だあああああああ、！畜生！皇子様も性格悪すぎるだろ！

でも、仕方がないから「わかりました。」と言ってついていく。  
マルサさんに近づいていき、

「すみません。ちょっと用事が出来たので今日はお店にいられそう  
にないです。」

「は？ちよつと、忙しいのに何言って……。」

マルサさんは私の後ろにいるマントをかぶった二人を見て押し黙る。  
こういう事には敏い人だから、何か厄介事に巻き込まれた事に気づ  
いてくれたのだろう。

心配そうな視線を向けられる。

私は、にっこりと笑みを浮かべた。

「大丈夫です。必ず、帰ってきますから。」

マルサさんは、その言葉に安心したのだろうか「行っておいで。」  
と言ってくれた。

.....さあ、この先どうなる私？



さて、今私は皇族様の秘密を知った事になる。

レヴィル殿下がご婚約の式典を逃げていた、という秘密を。

そして、平民である私がその事を耳にしてみました。

さあ、私はどうなる？

- 1、何事も無く家に帰れる。
- 2、言わないように頼まれる。
- 3、口封じに殺される。

………まあ、普通にこうやって馬車に乗って連行されてるからして1は無いだろう。

2も、皇族の方々が平民にお願い事なんてありえない。

…となると、3なんだけれども。  
死にたくない。どうしたらいいだろう。

そんなこんなでやってきました、お城に。

いろんな離宮がたくさんある中の、奥の方の一つの屋敷に招かれた。

奥の方に行くほどやばいって、誰かに聞いたことあるぞ！

やっぱい私、本当に帰れるのか？

マルサさんにうそついちゃったかも。ごめんなさい。

従者の人は部屋の外で待機している。

部屋の中にはメイドさんが五人と、レヴィル殿下とシュベルツ殿下



と私だけ。

メイドさんは部屋の端の方にいる。

真ん中のテーブルに二人が腰かけた。

私はどうすればいいのかと迷っていたら、

「君も座ってくれたまえ。」

なんてシュベルツ殿下が言う。

…無茶言うなよ。

皇族の人たちと同じテーブルに着けるわけがないだろう。

でも、言われた事にそむくと命令無視で首をはねられかねないので、  
大人しく座っておいた。

緊張するうっうっうっうっ！誰か助けてええええええええ！！

「レヴィル、午後にまた正式に式典をする。それに出席するように。」

シュベルツ殿下がそう口を開く。

「嫌でs



冷たい子でシュベルツ殿下がそう言い放つ。

レヴィル殿下もそれには黙りこんで、むくりと起き上がればまた腰かけて「申し訳ありませんでした、」と小さな声で言う。

あの拳をくらって平気な顔をしてるって、どんだけ丈夫なんだ。

この二人、怪物だ。

「さて、と。本題に入るが…。」

キ、タ。

シュベルツ殿下が笑顔で私の方を向く。  
無言でレヴィル殿下の目が向けられた。

怪物相手に、私はどうすればいいのだろう？



二人の視線が痛い。  
どうしたらいいのだろうか。

考えた結果、私はいい子ちゃんぶる事にした。  
うん、これぐらいしかできないもん。

「あ、あの、私誰にも言いませんから…っ！」

あわてた感じにそう言う。

おお、私って役者だ。

「レヴィル殿下がご婚約の式典をすっぱかしたなんて、そんなこと誰にも言いません…！」

無言。

おいおい、なんか反応してくれよ。

冷や汗がたらりと背中を流れる。

嗚呼、緊張で死にそうだ。

少しした後、先ほどと全く変わらない笑みを浮かべているシュベルツ殿下が口を開いた。

「君には、緘口令を敷かせてもらっ。」

「緘口令、ですか？」

「ああ。この愚弟のやらかした事を、誰にも言っでない。もしも破った暁には不敬罪として罰せられるからそのつもりで。」



ぐ、愚弟って…。

容赦ないですねシュベルツ殿下。

ほら、レヴィル殿下もむつつりとしちゃいましたよ、どうするんですか！

「りよ、了解いたしました。」

「ならいい。物わかりのいい子は好きだよ。」

にっこりと笑みを浮かべてそう言う。

……普通の女の子だったらキヤーツとか言うんでしょうけどね。私には胡散臭く見えて仕方ないんですよ。でも、引きつる顔で一応笑みを浮かべておく。

その笑みを見てレヴィル殿下は物珍しそうな、シュベルツ殿下は小さく眉をひそめられた。

やっべー、！表情まではコントロールできなかった、！

「よ、用件は以上でしょうか？」

狂い紛れにそういう、もう早く帰りたいよう！

「あ？ああ、そうだな。レヴィル、馬車の手配を。」

「了解いたしました。」

あ。  
何だかんだで帰れそうだが、  
よかったー！



さて、私朝霧漣、帰って参りました。

無駄に豪華な馬車に送られて、見事このお店に戻ってきましたとも！

帰ってきたら、マルサさんの熱い抱擁を受けた。おおっ、ちょっ

と痛いけど、嬉しい！

「アサギリ…！あんた、よく無事で帰ってきたね！」

「おかげさまで…！何とか無事に帰ってこれました。」

にこりと、相手を落ち着けようと笑みを浮かべる。

マルサさんも、その笑みに安心したのだろうか力を抜いてくれた。人の優しさを感じるのはこういう時だ、マルサさんの目を見ても、本当に心配してくれた事が分かる。

それから平凡が続いた。

マルサさんのお店で、お客さんとも仲良くやりながら何とかやって  
いた。

今日は買い出しを頼まれたので買い出しに行ってきた。

そのついでに、この間、といつてもずいぶん前だけど、見つけた私の  
秘密の場所に行くことにした。

家々が並ぶ道の上の方の、瓦礫を潜った奥にある、この街、国を見  
渡せるすごくいい場所だ。

細い道を行くと広く一面に広がる芝生。ふわふわとした此処で寝転  
がっていると、自然といい気分になってくるんだ。

不意に、カサ、と音がした。何だろう、と思って顔をあげたら、そ  
こには

いつだかに見た、フードを被った男性がいた。

今日も前のようにフードを被っていて、さらさらとした茶色の髪は隠れている。

個人的には、こんなにきれいな茶髪、日本では拝めなかったからフードを外してしまえばいいのと思う。綺麗だから。

お互い、視線があって、しばらく無言になった後、

「あー……、こんにちは、？」



結局、私の口から出たのはそんな言葉だけだった。

1  
-  
1  
3

相手は貴族かもしれないから、慎重にいかなくちゃいけない。  
万が一無礼なことをしちゃったら、私死刑。その場で切り捨てられ  
て人生e n d。

それだけならまあいい方だけど、（いや悪いけど！）悪ければ連帯  
責任で店にまで迷惑がかかる。

それだけは何とか回避しなきゃいけない。

でも、なぜだろう。

この人の、ちらりと見えた琥珀色の瞳。

とっても澄んでいて綺麗で、どうしてか悪い人には思えないんだ

「君とは、奇妙な縁があるようだ。」

くす、と柔らかな笑みを浮かべて、茶髪さんはそう言った。

……………くっそう、美形って微笑むだけでときめかれるから、絶対得してるな。

そんな捻くれた事を考えながら、ときめいている胸を静めつつ次になんて言おうかとぐるぐると考えていた。

そんな事を考えていたら、あちらから声をかけてくれた。

「以前は本当に申し訳なかった。怪我はなかったか？」

「あ、いえ、大丈夫です。ただ、途にぶちまけちゃった材料代がもったいなかったといえますか…。」

「って、何言ってるの私！」

「こんな事言ったら相手の人罪悪感感じちゃうじゃないか！」

「ああ…、本当にすまない。大分前の事だが、詫びさせてほしい。  
…これで足りるか？」

「あああああやっぱり！罪悪感感じちゃってる！し、しかもお金払おうとしてるし！って！」

「む、無理無理無理無理無理無理！無理です！こんなに頂けません！」

私が、この世界に来て一番初めにならったのは、お金の事。

まあ、結構簡単で。

銅貨。銀貨。金貨。この三つで成り立っている。後はお札？みたいなもの。

お札みたいなものは10マール。（マールとは帝国共通のお金の数え方だ。）

銅貨は100マール。

銀貨は10000マール。

金貨は……何マールだったか覚えてない。それぐらい高価な物だ。ってことだけ覚えてる。マルサさんも覚えなくていいって言ったし。

庶民は銅貨をじゃらじゃらと持っていて、大抵はそれで会計を済ませてしまう。

たまに銀貨があると、たくさん銅貨でお釣りを出さなきゃだから面倒。

でも、銀貨なんて滅多に見ないからそんな面倒な事もなくていい。

そして、金貨なんてものは、滅多に……いや、庶民なら見なくて一生終える事もあるって言つてた。

その、金貨を。

ふ、袋一杯に、じゃらじゃらと。

惜しげもなく、差し出しやがった！

こ、これ日本のお金にしたらいくらぐらいなんだろうひいひいひい  
ひいひい！





### 1 - 1 3 (後書き)

久しぶりの更新になってしまい申し訳ありません！

半年以上更新してなかったってどんだけ放置してたんでしょう私…！

これからは最低一カ月に一回は更新していきますので、ほかの作品も！

では、失礼致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0429o/>

---

偽物語

2011年7月18日12時58分発行